

「ChaOIプロジェクト」で 静岡茶の新たな価値を創造

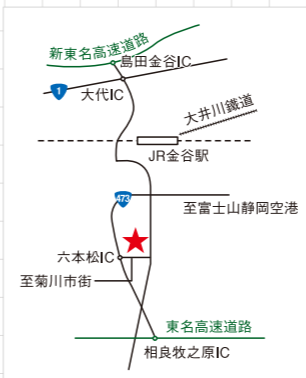
～オープンイノベーションによる本県茶業再生～



「山は富士 お茶は静岡 日本一」とうたわれるように、日本の茶業をけん引し続ける静岡県。しかし、近年はリーフ茶需要の減少や生産者の高齢化などから、本県の茶業情勢は厳しくなりつつある。この状況を打開すべく始まったのが、「ChaOIプロジェクト」だ。「オープンイノベーション」を合言葉に、新たな視点で「本県茶業」の再生を目指す。



「ChaOI-PARC」イメージ図 日本一の茶産地にふさわしい、茶景観と調和し、茶業再生を象徴する「研究拠点ChaOI-PARC」。



異業種連携によるイノベーション
古くから茶の栽培が盛んな静岡県は、生産量と茶園面積が共に全国のおよそ4割を占める日本一の茶どころだ。栽培に適した特色ある風土に加え、高い技術と生産者の努力により、質・量・流通の全てにおいて、日本の茶業をけん引している。しかし、近年は消費志向の多様化に伴い、ドリンク飲料や粉末茶などの安価な原料茶が求められ、本県が主力にしてきた急須で飲む高級リーフ茶の需要が減少。市場価格が低迷し、厳しい状況が続いている。そこで県は、異業種の技術や知識を結集し、研究施設と連携させたオープンイノベーションに取り組み、静岡茶の新たな価値や需要の創出を図る「ChaOI（チャオイ・Cha Open Innovation）プロジェクト」を令和2年度に開始した。

このオープンイノベーションの推進組織として令和2年3月に設立した「ChaOIフォーラム」は、生産者、茶商、食品企業、大学、研究機関などからなるプラットフォームだ。およそ4割が異業種という会員には、大手飲料会社や高級リゾートホテルチェーン、有名商社や菓子メーカーなどが名を連ねる。

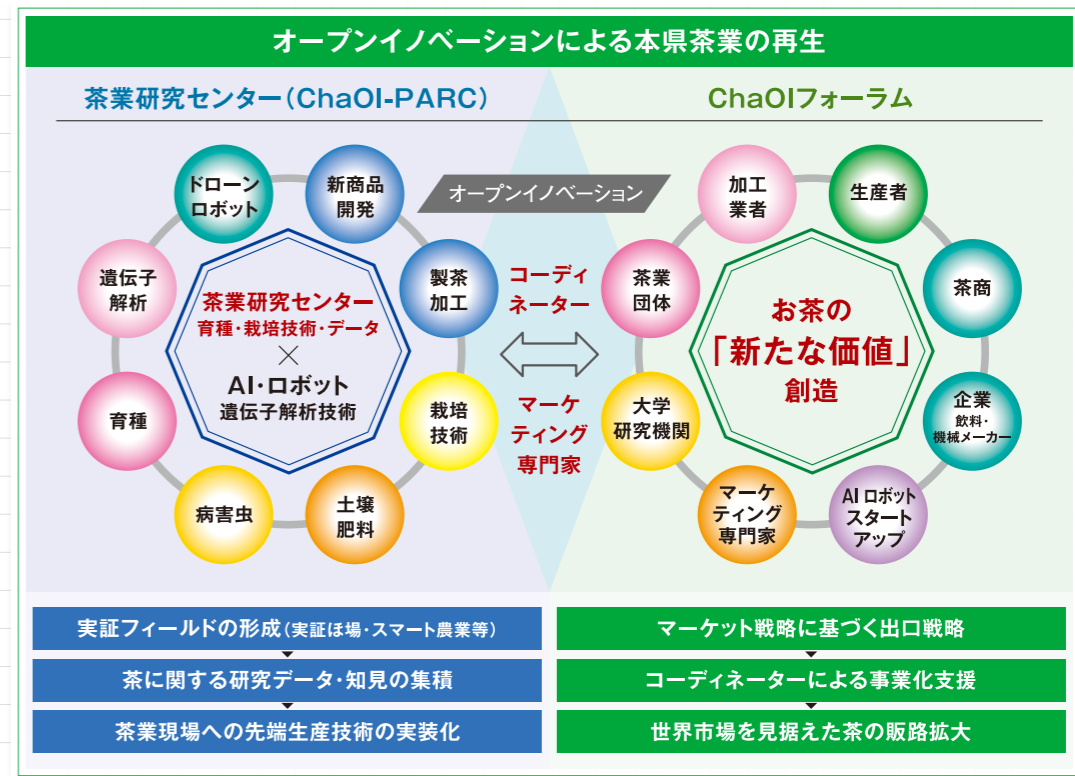
有望事業を後押し

プロジェクトではフォーラム会員の取り組みを具体的に推進するため、各種補助金制度も創設。「新商品開発」

組みを展開。本プロジェクトの基盤研究機関である茶業研究センターとの連携事業モデルになるのは、高GABA茶研究コンソーシアムが企画した「GABAを豊富に含む静岡茶の安定大量生産技術の確立」事業だ。

GABAは摂取量が高くなるにつれて①高めの血圧を下げる、②一時的なストレスや疲労感を緩和する、③認知機能の一部である記憶力が維持・改善する、と段階的な効能がある。茶を嫌気処理することで、茶由来のGABA含有量を高めることができるが、これまでの技術では茶由来のGABA含有量による②の機能性表示は困難だった。そこで本事業では②の機能性表示を目指して新たな技術開発に取り組んでいる。「おいしくて、ストレス緩和にも効果的」という付加価値の高い静岡茶の開発は、健康美容分野や、近年日本茶の需要が急増している海外への販路拡大が期待される他、機能性という新たな切り口での品種改良にも弾みをつける可能性がある。

プロジェクトの始動から2年、フォーラム事務局には異業種や県



高GABA茶研究コンソーシアム、ChaOIフォーラム事務局、大学、専門家、茶業研究センターが機能性表示の届出に向けて協議。



コンソーシアム構成員の大井川農協と県志太榛原農林事務所の協力のもと、茶業研究センターが原料の栽培環境を調査。



太陽光パネル設置茶園における自動遮光システム導入のための現地検討。



高GABA茶生産現場における嫌気処理槽内の茶葉の状態確認の様子。

世界市場を見据えた静岡茶の拠点へ

具体的施策が先行して進む一方、茶業研究センターは令和6年度末に世界市場を見据えた、茶の先端研究開発とオープンイノベーションの拠点施設「ChaOI-PARC」として再整備される。国内外の茶業に関わる多様な人材が集う場にする

とともに、新技術開発においては、AOI-PARCや大学など先端技術を有する研究機関と企業など

外からの問い合わせが増え、前年の3倍以上になっているという。このような取り組みを一つづつ着実に成功させれば、静岡茶業が再生する日は、確実に近づいてくるだろう。

国内外の英知が集い、最先端の技術と設備、さらに美しい茶園の景観が揃った「ChaOI-PARC」は、茶の都しずおかのシンボルとして世界に誇る施設になるだろう。

発「販路開拓」複合作物のスタートアップ「需要に応じた生産構造の転換」「輸出向けHACCP対応施設等の導入」の5つの支援メニューが

ら、令和2年度は32件、令和3年度は52件の事業を採択した。令和3年度は、主に県の各研究機関と連携した専門性の高い取り